平成28年度
子どもがふみだすふくしま復興
体験応援事業

映像教育
CINELITERACY
プロジェクト

平成28年度 広野町

いいな広野
わが町発見

ふるさと創造・映像教育（シネリテラシー）プロジェクト

報告書

ひろの映像教育実行委員会

ふるさと創造・映像教育（シネリテラシー）プロジェクト　報告書

もくじ

- はじめに・広野町と映像教育　P3
- アクティブラーニングとしてのシネリテラシー　P4
- ひろのモデルへの期待　P5
- シネリテラシー CINELITERACY　P6
- 「いいな広野わが町発見」ふるさと創造・映像教育（シネリテラシー）プロジェクト　P7
- プロジェクト概要　P8
- 映像制作スケジュール　P9
- 上映会講評　P11
- 学生スタッフ感想　P16
- ふるさと創造学サミット　P21
- おわりに・映像教育プロジェクトひろのモデルの２年目　P22

福島県双葉郡と広野町の位置

はじめに

広野町と映像教育

福島県双葉郡広野町立広野中学校では、平成27年度から総合的な学習の時間を活用し、地域を取材し映画制作を行う教育手法「シネリテラシー（CINELITERACY）」の取り組みを始めている。

広野中学校がこの教育手法を採用した背景には、平成23年3月11日に発生した東日本大震災とそれに伴う原子力発電所の事故によって故郷からの避難を余儀なくされた双葉郡の現状がある。慣れ親しんだ土地から離れざるを得なかった双葉郡の各自治体では、故郷への正しい理解をどのように次世代に促すことができるかが教育課題の一つであった。

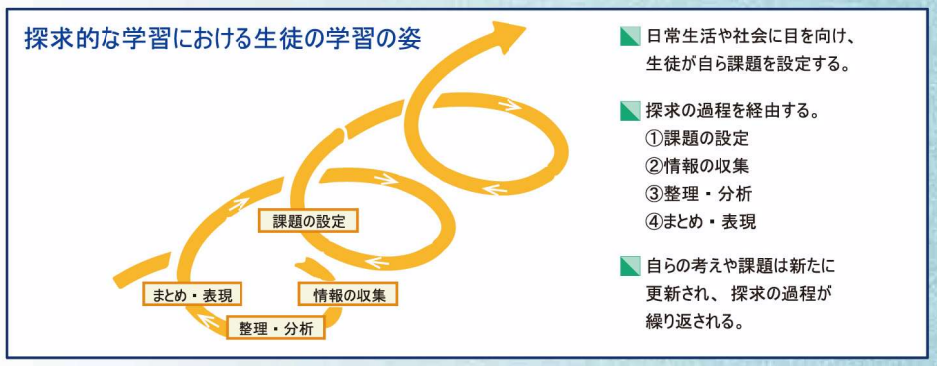
その課題解決への一助として、双葉郡内の各小中学校では「ふるさと創造学」を導入し、総合的な学習の時間などの学習の中で地域に着目した学びの推進がされている。広野中学校では、ふるさと創造学のアプローチとして、子どもたちが映像制作を通じて学習の目標に到達することを試み、平成27年度から中学校1学年が映画制作に取り組んでいる。

アクティブラーニングとしてのシネリテラシー

近年、日本においては、主体的な学びである「アクティブラーニング」が注目を受け、文部科学省が主導し教育現場での実践を積極的に推進している。他方で、アクティブラーニングという言葉が国内で市民権を得る前から、ユネスコを中心とした国際社会では主体的な学びが教育の主流とされ、実践が行われてきた。

オーストラリアにおけるシネリテラシーもまたアクティブラーニングの教育手法である。子どもたちは、テーマ設定から議論を開始し、テーマを掘り下げる過程で「考える機会」を多く経験をする。また、取材をするにあたって質問に向けた準備や、取材対象者の選定など、「多様な視点」を想像しながらプロジェクトを進める必要を経験する。さらには、最終的に「どのようなメッセージ（何を伝えたいか）をメディアを介して届けるか？」について自身の考えを主張しながらグループで一つの成果物を完成させる「合意形成」の重要さを経験する。

こういったプロセスが単なる表現学習の枠に留まらず、社会の中でどのようにコミュニケーションをはかり、どのように他者とプロジェクトを進めるかという重要な能力を育むアクティブラーニングの実現を可能にする要素となっている。



※中学校学習指導要領　総合的な学習の時間編　平成 20 年 9 月（文部科学省）、中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編　平成 20 年 9 月（文部科学省）より抜粋

ひろのモデルへの期待

映画制作を通じた学びの手法はこれまで国内各地でも行われてきた実例があるが、災害被災地における地域理解とソフト面からの復興を目的とした映像制作教育は広野町の取り組みが先進的なモデルである。

初年度となった平成 27 年の取り組みを総括する中で、災害被災地における実践の要素の中に、他地域での汎用の可能性が示唆された。それは、地域の担い手として必要不可欠な「地域理解」の学びと、復興に向かう災害被災地における「心の復興」の二点であった。

地域理解は、その学びの有無によって地域への愛着や当事者意識に相関があると考えられる。人口減少社会において、限られた人口をどのように地域の中で維持するかが課題になっている地域も多いが、地域理解を促し地域の担い手としての当事者意識を育むことが地域にとって重要となる。

心の復興は、災害被災地におけるハード面の復興と同時並行して取り組まなければならないソフト面の復興とされている。復興の担い手は、地域住民であり、その担い手の心のケアやモチベーションの維持は復興において大切な要素となる。他方で、この要素は災害被災地のみに限ったものではなく、変わりゆく地域の中でどのようにマインドチェンジを行いながらも未来を描くことへの意欲を促すかは、国内の各地域、特に高齢化率が高い限界集落や過疎地域における教育課題の一つでもある。

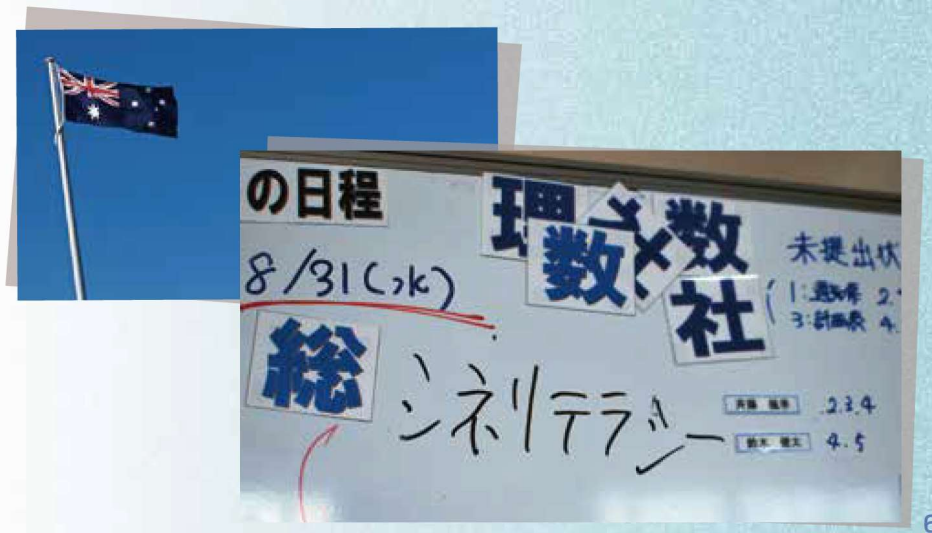
ひろの映像教育実行委員会では、地域理解と心の復興の要素を含んだ映像制作教育の取り組みを「ひろのモデル」とし、ひろのモデルが解決の一助になり得る地域への推進を行っていくこととしている。

シネリテラシー CINELITERACY

広野中学校が採用した教育手法「シネリテラシー」とは、映画制作を用いた主体的な学びの手法である。シネリテラシーは、オーストラリアにおいて公教育として導入をされ、国語教育の一環として行われてきた。映画制作を用いる主な理由は以下の三点である。

①映画は多様な役割によって制作される
②制作の仕組みを理解することでメディア･リテラシーを向上できる
③政策の過程を通じて多様な存在を認め合う

これらの理由の背景には、多文化多民族国家であるオーストラリアが抱える教育の課題があった。それは、移民を多く受け入れることで、国語（英語）力をどのように習得することができるか、また文化や宗教など異なる背景への理解を促し、多様性を向上させる教育が求められたからである。このような社会課題の解決の一助として、シネマ（映画）を用いたリテラシー（識字）教育であるシネリテラシーがオーストラリアで展開されてきたのである。



「いいな広野わが町発見」ふるさと創造・映像教育（シネリテラシー）プロジェクト

二年目を迎えた広野中学校における映像教育プロジェクトは、初年度に比べ大きく学習時間が増加し、年間を通じた総合的な学習の時間のほぼ全てを本プロジェクトに充てる形となった。総合的な学習の時間における到達目標などに含まれるパソコン操作能力向上の要素などを盛り込み、教職員の工夫と多大な協力のもとで大きく展開が見られた。

また、町役場や町教育委員会との連携の幅も広がり、生徒たちの学習の過程で復興企画課長への進捗状況のプレゼンテーションや、保護者にむけたプレゼンテーションなどが実施されたことは初年度に比べて大きく発展がなされた点でもあった。

さらに、外部講師や学生スタッフを招聘して行う映像教育プロジェクトの本番においては、昨年度と比べて複数の大学から多様な学生スタッフが参加をした。昨年度は、日本映画大学の学生のみによってプロジェクトのサポートがなされたが、本年度は 6 大学の多様な専攻の学生によってプロジェクトを進めることができた。多彩な学びや異なるフィールドを持つ学生の協力を得ることによって、参加生徒は社会の多様性を共有する機会となった。これは、本プロジェクトが目指す、表現学習の枠を超えて、地域の担い手を育てることへの重要な要素となった。

プロジェクト概要

プロジェクト名	いいな広野わが町発見 ―ふるさと創造・映像教育（シネリテラシー）プロジェクト―
科　目	総合的な学習の時間
参加生徒	広野中学校１学年 21 名
学習期間	平成 28 年４月～
プロジェクト本番	事前授業　７月 12 日（火） 制作期間　９月　５日（月）－９月７日（水）

外部講師・学生スタッフ

全体統括	千葉 偉才也（一般社団法人リテラシー・ラボ）
制作統括	島田 隆一（日本映画大学 /JyaJyaFilms）
講師	國友 勇吾
	佐藤 憲吉
	田中 圭
	辻井 潔
	前田 大和
記録	久保田 彩乃（一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマ）
学生スタッフ	小川 智之（早稲田大学大学院政治学研究科）
	奥村 駿（日本映画大学映画学科）
	梅田 優弥（宮城大学事業構想学部）
	佐藤 史香（早稲田大学大学院政治学研究科）
	坂上 えりか（東京芸術大学美術学部建築科）
	白鳥 飛翔（日本映画大学映画学科）
	鈴木 総平（日本映画大学映画学科）
	堰内 裕斗（日本大学工学部）
	徳山 敦己（日本映画大学映画学科）
	日高 花恋（立教大学法学部）
上映会講評	中山 周治（日本映画大学講師）

映像制作スケジュール

① 事前学習 7月12日（火）

講師と生徒の初めての対面。各班に分かれて、自己紹介やそれまでの学びについての確認を行った。さらに、テーマの掘り下げ、取材対象者の選定、取材計画について話し合い、作品を通じてどのようなメッセージを伝えたいかなどについても意見交換を行った。また、機材の操作などについても学び、インタビュー練習なども実施をした。

② 撮　影 9月5日（月）・1日目

プロジェクト1日目からは各班学生スタッフ2名が加わり、講師とともにグループ学習をサポートする。プロジェクト1日目の午前中は取材計画に沿って人や風景の撮影を行い、午後は撮影した画像などの確認をし、振り返りを行う。また、どのような編集を加え、どのような取材を翌日に行うかを議論する。

③ 追加撮影・編集　9月6日（火）・2日目

プロジェクト２日目の午前中も取材計画に沿って取材・撮影を行う。1日目の反省や気付きからの修正なども加え、メッセージを伝えるためにどのような素材が必要かを意識して取材・撮影を行う。午後は、各班によって柔軟に活動をし、追加取材をする班や編集に向けての議論をする班など、班ごとが主体的に考え行動をした。

④ 仕上げ・上映　9月7日（水）・3日目

プロジェクト最終日の午前中は各班ともに作品の仕上げに取り掛かかり、ナレーションを録音する班や生徒同士のインタビューをする班なども見られた。午後は、体育館に町民を招き、みんなで完成作品の鑑賞を行った。上映後に日本映画大学中山周治講師より講評を受け、さらに会場の観客からも多くの感想が出た。最後に、３日間一緒に活動した学生スタッフがそれぞれの想いを生徒に伝え、最終日を終えた。

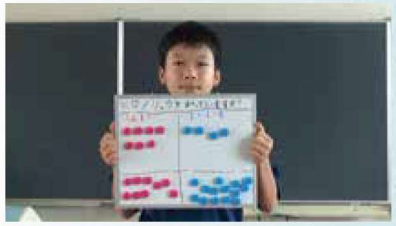
上映会講評

日本映画大学　中山周治

Hirono　みかんメモリー

坂道を4人でヨーイドンで駆け上る。ゴールはみかんの丘の頂上。そこからは大海原が水平線まで見渡せる。このオープニングがすばらしい。眩しそうに大海原を見渡す佐藤さん（映画の進行役）の表情も良い。広野町民はすっと彼女の心に寄り添うのではないだろうか。佐藤さんが様々な町民を訪ね、みかんの丘の歴史、大震災のときの記憶、自分の幼少の思い出などを辿っていく。みかんの丘を通じて、広野町の表情が見えてくる。この映画で特によかったのは、色々なインタビューがバランスよく配置されていて、観客がとても映画に入り込める構成になっていたこと。インタビューを受ける相手の人柄をちゃんと引き出していたこと。
佐藤さんの「（広野は）ほかの人がどう思っているかは分からないけど、私にとってはとっても大切な町」という言葉が映画の内容としっくり合い、心の底にストンと落ちる。

開け！化石の窓



面白いタイトルだなあと思って見始めたが、見終わってタイトルの意味に納得。このチーム４人の好奇心、探究心がストレートに映像で表現されていて楽しめた。細かなアイディアがいい。ヒロノリュウを町民がどれくらい知っているか、ホワイトボードをもって聞き取り調査するアイディア。オープニングで手描きのヒロノリュウのイラストが出てくるが、エンディングでは、白亜紀のヒロノリュウから新生代のマンモスまでのイラストが連なり、最後にはニンゲンのイラストが現れるアイディア。このニンゲンはグループメンバーのイラストになっていて本人にそっくり！恐竜から私たちまで命がつながっているということを化石は私たちに教えてくれるという話が

日本映画大学　中山周治

インタビューで出てくるが、このエンディングは見事なまとめになっている。ヒロノリュウは地球が動いていることを教えてくれる。東日本大地震もそのひとつである。実際に化石掘りに挑戦する 4 人はイキイキとしていて、「あ、貝みっけ」の喜びにわたしの心も躍った。見つかるものなのですね。

未来への思いをつめよう！

「広野町の郷土料理ってなんだろう」に始まるこの作品は、衣食住のうち「食」をテーマにした作品。食べるシーンがたくさん出てきて、見る人を飽きさせない。五感に訴える映画は人を共感させる力が大きい。映画を見ている私たちは、登場人物に自分を置き換えてイメージの中で食べている。だから、この映画を見ているとおのずと幸せな気持ちになる。イメージの中でお腹いっぱいになっていく。

最初に作った大師講団子、「まずい」と顔を歪めていたが、保健センター藤原さんの「昔、広野は貧しい町だった。」という言葉は忘れるわけにはいかないだろう。「まずい＝まずしい」ということも考えたかもしれない。

みかん料理を名産にする話のなかで、農家の北郷さんに取材するシーンも印象的だった。北郷さんは 50 年続けてきたしいたけ栽培を東日本大震災の影響で断念し、5000 本の木を失ったと語る。50 年、5000 本。万感の思いだろう。この話が、しいたけをもう一度復活させたいという思いも詰め込んで、ラストの「ひろの大好き弁当」の制作につながっていく。自分たちで作って、配って、食べてもらう、というアイディアは抜群だ。私が気に入ったシーンはラストシーン。教室でみんながわいわいがやがや、食べたり、話したりするシーンは、だれも演技でなく、自然な表情をしていた。それをカメラが長まわしで捉えていて、実によかった。

日本映画大学　中山周治

広野駅の復興と未来

広野駅にテーマを絞ったことで、とても深い考察に成功した映画だった。班のメンバーが冒頭のシーンで出し合った広野駅のイメージは「さびしい。ちっちゃい。暗い。」他の人々はどう思っているのか聞き取り取材に出かけた。いわきの病院に行くのに日ごろ利用している年配の女性たちは、「昔はにぎやかだった。」「駅が町の中心だった。」「駅前で盆踊りをやっていた。」と語る。

しかし、炭鉱でにぎわっていたころの広野、天皇陛下も降り立った広野を昭和の昔話として懐かしむだけで終わっていないところがこの班のすばらしいところだ。広野駅をそれぞれがどう感じているか、どうしたらいいかをアンケート用紙にして町民に協力してもらう。その回答を役場の復興企画課長に提出する。まさに市民教育、市民権教育だ。

駅の景観ひとつとっても、それを肯定的に捉える人も、否定的に捉える人もいる。つまり、社会は複雑で矛盾に満ちているということを学ぶ。そして、学びを通じて、今まで見ていた日常風景が違って見えてくる。最後の話し合いでは「（広野駅は」そのままでもいいのかなあと思った。」という声も出てくる。静かな町、帰ってくるとほっとする町。わくわくする町。駅のことを考えることが広野町を考えることにつながっている。

私が今年の発表会を終えて東京まで帰る列車に乗って、広野からいわきの間にいくつもトンネルをくぐっていたことに気づいた。それまでトンネルのことなどまったく気にしていなかったのだ。最後に列車に乗っているシーンが良かった。暗いトンネルを抜けてパアッと広がる風景。トンネルを抜けるシーンを見ているだけでも気持ちが開けてくる。お母さんの母胎から暗い産道を通って産まれてきたニンゲンの本性なのかもしれない。

日本映画大学　中山周治

Finding New Hirono

冒頭の撮影隊が進んでいくシーンは他の班にない工夫が見られた。自分たちが映っているということは、誰か別の人に撮影を頼んでいるのかな、と思いきや「自撮り棒作ったよ」という音声で種明かしをちゃんとしてくれた。復興というテーマは掘り下げるのが難しいテーマだ。この班は、広野に生まれ育った人、引っ越してきた人、仕事で来ている人、など様々な立場、背景をもつ広野のひとに丁寧にインタビューすることによって、「復興とは」の答えは千差万別であることを示すことに成功していた。大和田君が「（みんな震災で大変だったことを）撮影できたと思います。」と力強く語っていた通りだ。

ラストシーンでは取材後の「今の想い」が語られていたのが印象的だった。「町の人を喜ばせたい」、「技術者になって帰って来たい」、「現場作業員に弁当を渡す仕事をしたい」、「みかんを有名にしたい」

小６のときに自分たちが防潮堤に植えたドングリが大きくなる頃、みんなどんな大人になっているのだろう。防潮堤で「これがドングリ、これがオレ」とおどけていたカットは愉快だった。大人になってみんながこの映画を見たらさぞかし懐かしく思うだろう。同時に、ジーンとくるんではないだろうか。

上映会に参加しての感想

2015年に始まった映像制作授業の２年目。早くも進化していると感じた。昨年と同じ撮影期間であったにもかかわらず、インタビュー取材の対象者も自分たちが映像に映っている時間も倍増している。おそらく昨年の作品、授業に刺激を受けて、準備段階から構想が練れていたのであろう。内容をより豊かにしようという生徒たちの工夫と努力の賜物だと思う。どの作品も見終わった後、温かい気持ちになった。映画を撮る側の中学生も、取材相手の町

日本映画大学　中山周治

の人々も、それぞれの人柄、自然な表情がでていて、両者の距離が近く感じられたからなのだろう。

駅伝にたとえるならば、第 1 走者の先輩からバトンを受けて、第 2 走者である今年の生徒はさらに加速し、力走、疾走、さわやかな走りを見せてくれた。まだ伝統というには早いかもしれないが、伝統とは自然に発生するものではなく、自分たちの手で継承し作り上げるものである。映像授業の伝統を町ぐるみでぜひ盛り上げ、広野自慢のひとつになれば、この事業に当初から企画、運営してきた一人としてこんなに嬉しいことはない。毎年の作品自体が広野の宝＝未来への遺産となっていく。

今年の作品では、町の人々が多く登場していたのも良かった。日常的には中学生が見知らぬ町民に話しかけることはまずない。これは中学生に限ったことではない。映像制作という仕掛けを通じて、他者と出合えるのがこの授業の魅力だ。

文部科学省の主導でシティズンシップ教育の理念が喧しく唱えられている中、実際どうやっていいのか分からないというのが現場の本音だろう。しかし、この授業で広野中学校の生徒たちがやっていることは結果として、そのすばらしい実践となっている。まさに、市民（町民）が社会の運営に参画することの意味を学ぶ契機となっている。こうした学びを強制してはいけない。強制だと、体裁はよくとも、良い映像作品にはなっていかない。映像制作を通じて学ぶことは個々に違っていいのだから。

学生スタッフ感想

今回、初めて映像教育プロジェクトというものに学生スタッフとして参加させていただきました。
最初は自分自身がまだ学生という半人前な存在でありながら、子どもたちに何かを教え伝えることができるのだろうかという不安がありましたが、いざカメラを持って子どもたちと一緒に町に出てみると、私たちにとっても驚きと発見の連続でした。私に補佐できることといえばカメラやマイクの使い方程度のことで、あとの大切なことはすべて取材対象者となってくださった広野町や周辺の地域の大人の方たちが取材を通して示し、教えてくれたように思います。そして、撮影・編集などの制作の過程と完成した各作品の鑑賞を通して、広野町の歴史からも多くの驚きと発見とをいただくことができました。その機会を与えてくださったすべての方々に感謝します。

あれから 5 年半が経ちました。私の個人的な経験になりますが、2011 年の 6 月と 8 月に被災三県それぞれでボランティア活動をしたことがあります。当時は全国各地から多くの人々が様々な想いのもとボランティア活動をしに来ていました。しかし時が流れ、復興の段階や意味も変化していく中で、他県・他地域から被災を経験した土地へと訪れる動機が見えづらくなってきています。そういう状況下で行われるこの取り組みは非常に重要で大きな意義のあるものだと思います。私自身もあれ以来訪れていなかった福島の地に、今回のプロジェクトを通してまた関わらせてもらうことができました。

そして、このプロジェクトに参加しながら、いまの復興ってどういう段階にあるのだろう、これからの復興とはなんだろう、などとずっと考えていましたが、答えは意外と身近なところにあって、いま目の前で機材と悪戦苦闘しながら、地域の大人たちや歴史と正面から向き合っているこの子どもたちが逞しく成長していくことが一番の復興なのかな、と思えました。そう思わせてくれたのは子どもたち自身です。これからの広野町の復興・発展が楽しみです。また機会があれば、そこにほんの微力ながらでも関わらせていただきたいと思っています。

日本映画大学映像学科 3 年
鈴木 総平

4 日間という短い期間でしたが、充実した日々を送ることができました。映画作りをするのは今回が初めての事だったので、新鮮で楽しかったです！また活動中、すれ違った際に挨拶をしてくださったりインタビューにも快く応じてくださったりと広野町の人々の温かさにも触れ、広野町が好きになりました。そして何よりも、班の子たちと過ごす時間が好きでした。暑い中でもいきいきと撮影を楽しむ姿や、何をしたい、どこへ行きたいなどをワクワクしながら話している姿を見て、元気とエネルギーを貰いました。また機会があれば、ぜひ参加したいです。

立教大学法学部 1 年
日高 花恋

日本大学工学部 1 年
堰内 裕斗

僕個人としては被災地の復興の現状を知れたのが 1 番大きかったです。被災地の活動に参加するのが初めてだったのも影響していると思いますが、津波で被害を受けた後完成されたビルで働いている方々、これからどうなって欲しいかをポスターに書いている小学生などが特に印象に残っています。ニュースなどでは伝えきれていないことを知る機会となりました。また、今の自分に何が足りないかを知る活動にもなりました。参加できて良かったです。ありがとうございました。

私は、大学院で公共政策を学んでいます。そのため、町おこしや地方創生という言葉に触れる機会がとても多いです。しかし、実際の現場に触れる機会はそこまで多くありません。そのため、今回の広野町でのプロジェクトを通じて町を知る取り組みを肌で感じ、町の方々と接しながら同じ時間を過ごせたことは、とても貴重な経験となりました。

また、皆さんが複雑な経験をし、今でもまだ完全には元の生活に戻れていない中で、それでも、今いる人が老若男女、官民問わず、精一杯、新しい広野町を作っていこうという強い思いを感じることが出来ました。これが町を作るということなんだなぁとしみじみ感じることが出来ました。普段なら接することのない映画大学など芸術系の学生と接することもとても貴重な経験でした。このプロジェクトに参加でき、とても良かったです。ありがとうございました。

早稲田大学大学院政治学研究科２年
佐藤 文佳

プロジェクトを通して広野町の方への取材や編集のサポートをさせてもらいました。映像制作に関しては、知識も技術もないため、アドバイスはできませんでしたが、スタッフとして少しでも役に立てていれば幸いです。

プロジェクトに関わる中で、生徒や町民の方々から色々なことを感じました。広野町が好きだから、「郷土料理を広めたい」や「有名になってほしい」、「みんなに幸せになってほしい」など想いに触れ、そういった思いを持って取り組む生徒たちの姿は、「広野町の未来を担う人たちだ」という実感を私に与えてくれました。今回参加をした生徒たちは、地域のことを理解するだけではなく、外へ向けて発信するという機会になったと思います。また、自分たちの暮らす町がどんな風にして受け継がれてきたのか、これからどんな形で繋いでいくのか、そうしたことをも知り、かつ考え続けていく、このプロジェクトは、その起点となり得ると感じました。広野町や福島県以外にも多くの地域がその地域特有の課題を抱えている中で、課題に立ち向かい、解決していく上で土台となるのは、自分たちの暮らす町に対する理解とこうあって欲しいという想いであると感じています。このプロジェクトに参加した人たちが、これから町や社会が直面する課題についても考えを巡らせるきっかけになれば良いのではないかと、今回のプロジェクトに携わらせていただいた一人として、感じました。このプロジェクトには、映像作品を通じて多くの人に広野町を知ってもらうということ以外にも、参加する全ての人にとっての学びの場になるという大きな意義があると思います。是非これから参加される方にも、プロジェクトにおける意義を考え、感じて取り組んでいただければ嬉しいです。

早稲田大学大学院政学研究科２年 小川 智之

以前から趣味で動画を制作していたこともあり、プロの技術を間近で見ることが出来る今回のプロジェクトは楽しくてたまらなかった。特に私が夢中になって観察していたのは、撮影と編集である。撮影の際には、常に完成した映像を頭の中に入れてカメラワークなどを調整していた。例えば、インタビューの際には、人物だけを撮影するのではなく、素材として自然な会話のシーンなども撮影していた。インタビューの音声とその内容に関連した映像を上手く組み合わせるような工夫がされていた。

プロジェクトの間、インタビューや中学生との交流の中で、東日本大震災のときの生活の様子について話題になることが多かった。そこには、メディアで取り上げられるような「悲しい」「恐ろしい」などのエピソードは少なく、中学生たちはむしろ楽観的に体験を話してくれた。津波が迫ってきているときは、恐怖という感情より「夢でも見ているような気分だった」ことや、避難生活では「他の地域の人たちと遊んだりして楽しかった。友達が増えた。」というような、私にとってはある意味で新鮮な体験談を聞くことができた。中学生たちは、自分なりに東日本大震災について考え、広野町が今後どのようになって欲しいかをこのプロジェクトの映像製作を通して様々な場面で語ってくれた。メディアでは、ほとんど取り上げられない中学生たちの声を聞くことができた。

映像の撮影の中で町の公式マスコット「ひろぼー」の中に入ることができた。ゆるキャラに入ることができたのは、人生で初めての経験だった。予想通り、ゆるキャラの中は灼熱の密閉空間で、長時間入ることはできなかった。また、手足もほとんど自由に動かすことが出来ず、声を出さずにキャラクターの感情を表現することが難しくなった。某非公式人気ゆるキャラのあのような動きは、相当な体力と運動神経があって初めて出来るのだと身を以て知った。とはいえ、一時的に別のキャラクターとして中学生たちと交流できたのは良い思い出となった。

宮城大学事業構想学部 1 年
梅田 優弥

ふるさと創造学サミット

双葉郡教育復興ビジョンをもとに平成26年度から開始がされた「ふるさと創造学」は、双葉郡8町村のそれぞれの学校において個性ある学びが展開されている。ふるさと創造学サミットは、毎年12月上旬に開催され、各校の取り組みを発表する場となっている。

本年度の広野中学校1学年は、取り組みの説明を行った上で映像作品を上映し、来場者が感想や意見を述べる形式での発表を行った。

他校の生徒や教員に向けた発表

プロジェクトの説明やポスター展示

サミット参加者による集合写真

映像教育プロジェクトひろのモデルの２年目

総　評

映像教育プロジェクト「いいな広野わが町発見」は、２年目を迎えて講師陣と中学生がともにシネリテラシーという学習に対して、ごく自然体で取り組んでいたことが作品を通じて実感することができました。

この取り組みは、子どもたちが学びを通じて、広野町の魅力を再発見することを目的としています。その観点から作品を見ると、本年度はさらに目的への到達に近づいているように感じました。本年度の５作品は、いずれも故郷の自然・文化資源をしっかりと捉えると同時に、そのテーマごとに異なる町民の想いなどに真摯に向き合っていました。また、復興に向かう町に対して、子どもたちの想いがしっかりと主張がされ、未来を語り、未来を描こうとしていることを強く感じました。

他地域での展開

本年度の特色の一つとして、ひろのモデルの他地域での汎用が挙げられます。

今回取り組んだシネリテラシー教育の成果の一つは、原発事故による避難のため故郷を一時離れざるを得なかった生徒たちに、「ふるさとの歴史を知り、伝統・文化を見直し、ふるさとのよさを再発見させる」という「ふるさと創造学」のねらいを、映画制作を通して達成できたこと。二つめは、映画制作の取材活動や編集に関わることで生徒たちの故郷に対する考えを練り上げ、深めることができたこと。三つめは、広野町や生徒たちの思いを発信する方法として、映画はインパクトがあり、大変有効であることが再確認できたことです。今後、ふるさと創造学の学習成果を発信する手段として、今回のような映画作りを定着させていきたいと考えています。

（広野中学校星秀美校長からしんゆり映画祭 2015 へのメッセージ　一部抜粋）

初年度の取り組みを終えた平成 27年末、広野中学校・星秀美校長先生から「しんゆり映画祭 2015」に寄せられたメッセージの一部を読みながら、広野町での継続実施の意義と同時に、他地域での汎用の必要性も感じました。星先生のメッセージには、単に災害被災地における学びとしてシネリテラシーが有効であることだけではなく、どの地域でも必要とされる子どもたちの「地域理解への学び」を達成するツールとして「映画」が有意に働く可能性を感じるものでした。

そして、本年度広野町での取り組みを参考にした映像制作プロジェクトが、東京都豊島区においても実施がなされました。豊島区では、小中学校あわせて７つのグループが地域を歩き、地域の魅力を再発見するプロジェクトに挑戦をしました。これらの作品もまた、地域の「いま」を切り取った素晴らしい作品が多く、関わったスタッフや住民に新たな気付きを与える意義深い取り組みになりました。

復興に向かう広野町の中で、学校と地域が連携しながら子どもたちの学びをサポートするシネリテラシーの取り組み。広野町の新しい文化として広野町のまちづくりの基盤となると同時に、他地域の課題解決の糸口になることも大いに期待できた２ 年目の取り組みでした。広野町の子どもたちが次は何を描くのか、今から楽しみで仕方ありません。

ひろの映像教育実行委員会委員長
日本映画大学特任教授
映画監督　千葉茂樹

第１回日本こども映画コンクールにて入賞

報告書作成ワーキングチーム

発　行：　ひろの映像教育実行委員会

編　集：　一社）リテラシー・ラボ

デザイン：　千葉　くらら

映像教育
CINELITERACY
プロジェクト

© ひろの映像教育実行委員会 2017